

福祉系 対人援助職養成の 現場から³⁹

西川 友理

クイズです。

保育士や社会福祉士の養成校入学者の中に、

「児童養護施設の職員になりたいんです」といって入学して来る学生が、2011年度から急に増えました。

それまでは、「児童養護施設って何？」という入学生が大半だったのですが、この年から、児童養護施設の認知度が一気に100%になり、またその仕事に関わりたくて入学して来るも増えたのです。さて、なぜでしょうか。

いきなり正解を書いてしまいますが、2011年度の前年、2010年12月に、伊達直人さんが児童養護施設にランドセルを寄付したのです。

いわゆる「タイガーマスク運動」が社会で大きな話題になりました。

当時、何かの社会的養護の会合で、施設職員同士が、

「あなたのところ、タイガーマスク来た？」

「来はりましたよ！あとセーラーMoonからもきました。」

「うちはキャンディキャンディから寄付がありましたよ。」

「ああ、あの子ども孤児院育ちやしねえ、なるほどねえ…。」
という会話をしていらっしゃったのを覚えています。

タイガーマスク運動で上がった 児童養護施設の認知度

とにかくそんな調子で、タイガーマスク運動は連日ニュースショーやワイドショーで取り上げられました。

テレビをはじめとしたメディアでは、90年代後半頃から、虐待についてはセンセーショナルに取り上げられていましたが、虐待の被害を受けた子どもがどのような施設に措置され、どういうケアをされるのかということについては、一般的には知られていませんでした。

しかし、タイガーマスク運動を取り上げる番組では「そもそも児童養護施設って何？」というところから説明をします。さらには「虐待を受けた子どもの入所が多い」「少ない職員数で子ども達を支えている」といったことも説明に出てきます。

それらのメディアに触れた高校生が、「そんな施設があるのか!」「私にも何かできるかもしれない」「そんな子どもたちを助きたい!」と、児童養護施設で働くことを志望し、入学することが増えたのでした。

「ではさぞかし、全国の児童養護施設は、人材を選び放題なのだろう」と思われるかもしれませんが、実は今、求人を出してもなかなか応募がなく、多くの施設が人材確保に頭を悩ませてい

らっしゃいます。

実際に就職に結びつくかというところ…

上記した通り、入学時には児童養護施設や乳児院に就職したいという学生が一定程度いるのですが、いざ就職先を決める段階になると、保育園や幼稚園、時には一般企業から内定書をもってきます。

「え?あなた児童養護施設への就職を目指してたんじゃないかったっけ?」と聞くと、

「うーん、色々考えたんだけど、やっぱり保育所にします」

「私は、子どもの分野は、ちょっと遠慮しとこうかな、って思って…」

と言葉を濁します。

さらに話を聞くと、

「だって虐待されてきた子どものお世話って、大変そうだから」

「自分の子でもないのに、お世話見るとってやっぱり大変やと思うから」

そして言うのです

「そんな責任の重い仕事、わたしには出来ないと思うんです」

「保育園の先生も、幼稚園の先生も、もちろん一般企業だって、責任ある仕事だよ。児童養護施設の職員だけが責任が重い仕事なわけじゃないよ。」

と返すと、

「いや、もちろんどんな仕事でも、責任はあるってわかっているんだけど…」

「うーん、えっと…何でそう思うかというところ…何でだろう。」

「…とにかく、なんか、大変そうすぎて…私には無理だと思うんです。」

虐待問題や、発達障害や、複合的な家族問題など、難しいケースがたくさん増えて来ている現場。それは確かにそうなのですが、だから、しっかり知識があって、人間的にも高潔で、強くて、もうそれはそれは素晴らしい聖人君子でないと、児童養護施設の職員にはなれないと、考えている学生が多いように感じます。

ではこのような現状においても、児童養護施設への就職を希望する学生は、どれだけ高潔で賢くて聖人君子か、というと、実はものすごく優秀であったり、意識が高かったり、使命感に燃えているようでもないように感じるのです。

もちろん、子どもの支援がしたい、親をサポートしたいという気持ちはあります、しかし、深刻そうな、真面目そうな顔で、問題状況を熱く語る学生よりも、もっと気軽に、軽やかに、子どもと接する学生の方が、サラッと受験して、サラッと受かって、しかもサラッと長年現場での経験年数を重ねていくように感じます。

彼らには、何があるのでしょうか。

「とりあえず、連れて帰って みんなで育てた」

もう亡くなってしまいましたが、私の知り合いに、生きていれば今年で98歳になっていたはずのおばあさんがいました。この方は子どもの頃、周囲が山に

囲まれた田舎に住んでいました。

おばあさんが10歳位の時に（ですから今から約90年前ですね）、近所の家で、本妻がどうだとかお妾さんがこうだといったトラブルがあり、その家にいた2歳の女の子について「誰も面倒見られないね…」「捨てるしかないか…」と、大人同士が相談をしている状況をたまたま目にしたとの事です。そのおばあさんは当時女の子とは血縁も何もなく、そのトラブルについても何一つ関係してはいなかったのですが、

「そんなに誰も育てないんなら、うちで育てる！」

と、女の子の手を引いて家に連れて帰ってきたとのことです。

「というわけで、連れて帰ってきた。」と年端もいかないその子どもを家にいた大人たちに見せました。

その瞬間こそ、皆「ええーっ！」とたいそう驚いたらしいのですが、

「まあ、そういうことならねえ、しょうがないねえ…」

と言い合い、結局育てたとのことでした。

この話を初めて聞いた時には「おおらかにも程があるやろ！」と、大変驚きましたが、存命中、そのおばあさんは「昔の田舎では、けっこうそんな事あったで」と言っていました。

考えてみればその昔、年金も医療保険も、児童手当も児童養護施設もない時代は、「イエ」や「ムラ」が社会保障制度代わりだったのだと思います。国が生活を保障してくれるシステムはほとんどありませんでしたが、むしろそのせいで、いや、そのおかげで、生まれた時から、

成長し、子ども時代を過ごし、青年期を過ごし、大人になり、結婚し、子どもをもうけ、年老い、やがて死ぬまでの一連の流れが、自分の手が届く範囲、目で見える範囲で行われており、生活のあらゆる保障が目前で展開されている様子が見て取れたのでしょう。

そう考えると「イエ制度」は窮屈で自由度が低かったかもしれませんし、生活の見通しも立ちにくかったかもしれませんが、生活の見通しに対する「リアリティ」は今よりもあったのかもしれませんが。誰かや何かに排除されるリアリティも身に染みて理解できた一方、誰かや何かに助けをもらうリアリティも生活の中にあったのだと思います。社会保障の単位がイエやムラである以上、現実的な生活上の取捨選択を目の前で、あるいは身をもって知る生活を過ごしたのだと考えられます。

そのような社会において、「子どもを作る」ということは明らかに将来計画の一環であったり、未来への投資であったりしたのではないのでしょうか(子どもの存在を将来の投資と考える是非については色々と問題を感じますが、今はそれを横に置いておきます)。そのような社会であったからこそ、イエ制度のような、血の繋がりや土地の繋がりといった明確にウチとソトを分ける線引きシステムがある一方で、それらを生活者のレベルで適用させる際には、柔軟な対応があったのだらうと思うのです。そうしないと明らかに生きていけない人がおり、それもまた“明日は我が身”だからです。

生活をするという事は、様々な人と一緒に生きていくことが当たり前で、子ど

もも、将来のために皆で育てるものであるという考え方が当たり前だったのではないだろうか、と思います。

そして、児童養護施設などの施設職員になって機嫌よく、長く働けている人の中には、地域の祭りの青年会、大人数の子ども会、プレーパークや冒険あそび場など、どちらかという上記したような一種混沌とした人の交わりを子どもの頃、あるいは若者になってからでも、経験した人が多いように感じています。例えば「虐待問題を何とかしたい!」とか、「子ども達を何とか助けてあげたい!」といったような、熱さや真っ直ぐさももちろんあることはあるのですが、子ども達と無理せず軽やかに付き合っていたことのある大人からは、人の繋がりに対する深い信頼と、生活の見通しに対するリアリティを感じるがあります。

ある社会的養護の子ども達の遊びの集まりに参加した時、自己紹介の時に、「社会的養護にいる子ども達の力になりたい、何か助けに慣れれば、と思ってやってきました!」と言ったボランティアさんがいました。その瞬間、施設入所中の子ども達が、いかにも白けたような目になったことが忘れられません。

ある児童養護施設に関わっていた時、施設内のボランティアに来る人たちの中でも「虐待問題に対応していくぞ」とか「大変なことに関わっていくぞ」というような勢い込みがある人は数回で来なくなり、多様な子ども達のいる場で自然に場を共有し、ありのままの人として子どもと関わる人は、細く長くなんと

くゆるやかに続いていらっしやったことを覚えています。

「してもらう人」と 「してあげる人」

児童養護施設などに代表される生活施設の中で、メインの支援として行われていることは、“生活”です。

365日24時間、疑似的な家庭・家族として、様々な人と一緒に「普通の生活の営み」を過ごしていく場所です。

森岡清美は家族を「夫婦関係を中心として、親子、兄弟、近親者によって構成される第一次的な福祉追及の集団である。ただし、これらの要件をすべて充足する必要はなく、夫婦の一方を欠く父子のみや母子のみであっても、親または子あるいは双方を欠く夫婦のみであっても、血縁関係を欠く養親子であっても家族に含まれる。」と定義しました。

普通の家族生活において、私たちは何かを「してもらう人」と「してあげる人」という役割が固定されていることは基本的にありません。してもらう、してあげる、という役割は常に入れ替わり、相互協力的に「第一次的な福祉追及」が行われていきます。

生まれたばかりの赤ちゃんがいる、常時介護が必要な高齢者がいる等、家族の中で、誰かが何かをしてもらうだけ、あるいはしてあげるだけになってしまった時には、家族内外のサポートが入ります。フォーマルサポート（制度的なサポ

ート）の代表的なモノは保育所に預けたり、ホームヘルパーが訪問したりといったものです。インフォーマルサポート（制度によらないサポート）では、いつもは手伝ってくれない息子がご飯を作りはじめたり、洗濯担当でない夫が洗濯物を畳んでくれたり、隣近所の人がおかずをもってきたり、友人が話を聴いてくれたりといったものです。そうやって皆の相互行為があって初めて、健康な家庭生活が成り立ちます

それらのサポートがない、あるいは少ない事から、誰かに負担が多くかかったり、風通しが悪くなったりして、家族でいることにしんどさが生まれることがあります。家庭内に不健康な空気が淀みます。

家族は普段から起居を共にしている分、扶養する責任もある分、お互いに負担が大きくなりがちで、そのくせ「家族愛」で片付けられがちで、でも確かに無視できない愛憎混じった感情のやり取りがあるものです。家族の構成員が、お互いにそれを認識して、配慮し、思いやり、風通しを良くする工夫をするなどの対策が必要です。

そうやって家族内の、あるいは家族外との、皆の相互の助けあいがあって初めて、健康な家庭生活が成り立ちます。

そのためには、個々の役割が固定され過ぎると余裕がなくなります。いつでも「してもらう私」になってもいいし、いつでも「してあげる人」になれるという余裕ある私でいると、家族構成員は機嫌よく過ごせます。

2012年のISSPの調査結果によると、

「小学校入学前の子どもの世話は、主に家族が担うべきだ」と思う人は、わが国では 76.5%、世界的に見るとかなり高い水準であるとのこと。さらには「民間の保育サービス事業者が担うべき」という回答が 11.4%ありましたが、日本で民間の保育サービスを利用するには、結局家族がその費用の大部分を負担することになるので、実に 87.9%の人々が「子育ては家族のもの」と考えているということになります^{注1)}。

昔は、地域の繋がりやいわゆる「ナナメの関係」と言われる人間関係がゆるやかにある中で、イエなどの家族の支援が存在している、という構造がありました。ところが近年は地域の繋がりが随分弱くなっています。弱くなったところに「子育ては家族のもの」という概念が根強く残ってしまうと、子育てを担う人は本当に、家の中で、家族が誰の助けも借りず、子どもに対し「してあげる人」にならざるを得なくなります。

**「責任が重い仕事」
＝「責任を重く背負わされる
“家族”という仕事」**

そして、社会福祉士でも保育士でも介護福祉士でも、養成テキストの中には「どのように支援をするか」が書かれています。いわば支援者は「してあげる人」、被支援者は「してもらう人」という役割が固定されて書かれています。被支援者同志のピアサポートや、被支援者同志の力動により助け合いが起こるグループワークなども紹介されていますが、その

際にも支援者はそれらの状況に対して「専門職として働きかける人」です。

生活施設、特に児童養護施設は法的な枠組みでは当然「支援をする施設」ではありますが、実際に行われていることは疑似的な家族のような生活です。

冒頭記したように、いざ就職するとなった時に児童養護施設の職員を選ぼうとしない、という背景には、「役割が強く固定された家族」になってしまうということ、つまり「疑似的な家族の中で、ただただ『してあげる人』でいることを当然と考えられてしまうという役割を担うことになってしまう」という事に対して恐れが強くなってしまいうためではないでしょうか。

さらには、施設入所する子ども達は虐待のケースや発達障がいがあるケース、複雑な家族問題を抱えた子どもが多いといった内容を学びます。ますます「被虐待等の大変な問題を抱えている子どもを対象とした支援をしなければ」という事態の深刻さを感じ、自らの「してあげる人」という役割の使命感を強化させられることとなります。

多様な誰かと一緒に過ごし、助け合う経験を、身をもって知っている人たちは、自然と「してあげる役割」に固定されず、一緒に過ごすふるまい方を知っているように感じます。それは専門性の高さ・低さに関係なく、ただ生活する人として、ただ隣にいる人として過ごすお作法を身に着けているように思います。

そして、子どもが多様な誰かと一緒に過越し、助け合う経験が出来るような場

は、2歳の子どもをつれて帰ってきたおばあさんの時代と比べると、ずいぶん少なくなってしまうようです。

最近増えてきた、 「子どもの居場所」

しかし近年、子どもの居場所作り、子ども自身が仲間をサポートする場所など、子どもをキーにして、様々な居場所が生まれています。

近年見られるこれらの居場所には、「子どもは力なく、弱く、何かしてあげる対象である」という考え方はあまり見られません。どちらかという子ども自身が積極的に場所を作る担い手となったり、場を作る重要なファクターとなったりしている場が増えてきました。

してあげる人、してもらう人、という役割を超えた場が欲しい、という人たちが増えてきているのでしょうか。これら

が新たな「多様な誰かと一緒に過ごし、助け合う」場になり、やがてこの場で相互関係を学んだ大人が増えていくかもしれない。そんな人こそが子どもに「機嫌のいい生活の仕方」「社会で家族を健康に維持していく方法」を、その背中で教えられる大人になるのではないかと考えています

・・・・・・・・・・・・・・・・

注1) 「社会で子供を育てられない国・日本 なぜ「育児は家族で」発想が虐待を産むか」プレジデントウーマン 2019年7月10日

<https://president.jp/articles/-/29180>

より。

ちなみに OECD 加盟国中、日本は6位です。1位はメキシコ (82.4%)。

その他、オーストリア 60.9%、韓国 57.1%、アメリカ 56.5%、ドイツ 41.1%、フランス 30.9%、フィンランド 13.1%。などなど。